

伊勢物語の魅力

——歌を回して楽しむ妙技——

吉 良 幸 生

わが国の古典文学のなかで、『伊勢物語』（以下勢語と略記）ほど時代を越え世代を越えて愛読された作品はあるまい。その魅力はなんとと言っても一二五段の中核をなす諸段の主役が、六歌仙の一人で色好みの貴公子、在原業平を想わせるからである。勢語は、当時巷間に喧伝されていた彼の奔放な色恋の、あるいは人間味溢れる交遊関係のエピソードに、現存する私家集『業平集』の元となったとされる諸伝本のなかの業平の名歌を取り合わせて、それを伸縮自在な詞書でもって巧みに物語化した、いわゆる歌物語である。歌が虚実^な美しい交ぜの詞書で物語化された逸話のなかで鮮やかに生動し、歌がまた逸話のドラマ化に一役買うという相乗効果もあって、われわれはいやが上にも雅やかで艶やかな色好みの美学（文学化）に魅せられるのである。勢語には謎が多い。書名も『中將の集』、『在五が物語』、

『在五中將の日記』などあって、中古ではどれが通称だったのかも分からない。作者も業平自記説から、伊勢の御説、在原家一門の人による改作増補説、紀貫之説に至るまで諸説あるが、いずれも決め手を欠く。作者が不明な分、いづれも成立したのかも定かではなく、『古今和歌集』（九〇五）の撰進前後から、承平五年（九三五）ごろ成立した紀貫之の『土佐日記』、さらに下って天曆七年（九五三）、村上天皇の勅命によって撰集された二番目の勅撰集である『後撰和歌集』の成立後に至る七、八〇年を巡って諸説がひしめいている。

勢語の原形態は、おそらく業平を想わせる男が絡む斎宮との禁断の恋物語、二条后との身分違いの恋物語、麗しい主従愛を描く惟喬親王物語、このなかで評判の高い章段のいくつかを寄せ合わせた三、四〇段程度の歌物語だったに

違いない。それを、業平の歌とそれに絡めた小物語の面白さに触発された多くの文人たちが、書写の過程で何とか業平にあやかろうと、蘊蓄うんそくを傾けては増補加筆していったため、原形態が分からなくなってしまうのだ。それを憂えた在原家に縁のある誰か（貫之？）が、雑多な章段を業平の一代記風に編集し直した。それを中世歌壇の権威御子みこじ左家の宗匠藤原定家が若干の修正を加えながら一二五段に厳選し、数回にわたって写したというなかの一本が、今日底本とされる定家筆本である。ただ、定家筆本の歌二〇八首のうち、業平の歌とされる歌は七〇首ほどで、すべてではない。凡庸な歌が化けてうまく業平物語の前後に花を添える章段もあれば、ちよつとした詞書によって笑いを誘う小咄おどになっている章段もあり、それらの章段の間を縫うようにして、業平一代記は構成されている。

それにしても不思議なのは、「筒井筒つついづつ」（二三段）や「狩かの使つか」（六九段）のように、歌を取り込んだ短編小説風の章段（これを甲類とする）に交じって、およそ歌物語の体をなしていない、わずか二・三行からなる章段（これを乙類とする）が多いことだ。例えば、

A むかし、をとこ、はつかなりける女のもとに、

逢ふことはたまのをばかりおもほえてつらき心の長

く見ゆらむ（勢語・三〇段）

B 昔、をとこ、つれなかりける女にいひやりける。

行きやらぬ夢路をたのむ袂たもとには天あまつ空なる露やおく
らむ（同・五四段）

こうしたストーリーのない詞書と歌だけのものが、全体の四割弱ある。同じ歌物語の『大和物語』にも、一七三段中に二〇段ほど乙類はある。だが、両著に大分遅れて成立したとされる『平中物語』に乙類は見られない。この甲類と乙類の混在をどう考えればいいのか。勢語や大和物語に乙類が少なからずあるというのは、平安人が乙類をも甲類と同じジャンルと認識していたことだ。定家も勢語の章段を選別する過程で、乙類を排除していない。これを、多くの短歌のそちこちに長歌が点在する『万葉集』と同じようなもの、と見ることもできよう。だが、万葉集を繙ひもとけばすぐ分かることだが、万葉人は古代歌謡の母体は長歌であり、短歌はその長歌の申し子と認識していた。柿本人麻呂のころに、長歌のエッセンスを最後に反歌はんかで復唱する形が定着すると、そのコンパクトな手ごろさが大いに受け、反歌は次第に長歌を離れ、やがて短歌として親をも凌ぐ勢いを見せるようになる。だから、両者の混在は二世代同居のようなもので、ごく自然なのである。歌物語の甲類と乙類にも、これと同じような親近性があったに違いない、なければただのごた雑ぜにすぎない。

歌物語は歌に添えた詞書が進化したものである。歌の詠まれた背景や事情をメモ風に端書きして歌に前置きする

形は、すでに万葉集で一般化している。多分、この形そのものは中国の詩の「詩題」に倣ったものだろう。詩の国中国では古体詩、近体詩を問わず、詩に簡潔な表題（詩題）を付す習わしがあった。古体詩では例えば「桃夭」（周・詩経）や「帰去来辞」（六朝・陶淵明）など、後人が詩の冒頭や一部を用いて後付けしているが、近体詩になると、例えば「春望」（盛唐・杜甫）や「偶成」（南宋・朱熹）など、自らが詩の内容や動機など詩題を前書きするようになる。六朝から初唐の中国文学の影響下に編まれた日本最古の漢詩集『懷風藻』（七五二）には、一二〇首の詩篇が収録されているが、詩題は概ね漢詩に倣っている。

万葉人は漢詩のもつ整然とした韻律や詩形の美しさや豊かな表現力に魅せられながら、新生短歌に漢詩に匹敵する表現力を持たせることはできないか、さんざん知恵を絞ったものと思われる。その過程で、三一音字という短歌の足らず前を補う手段として、詞書が活用できることに思い至った。単なる叙景歌には「山部宿祢赤人の歌一首」（卷三・三八四）とか、「露を詠みき」（卷一〇・二二三三〇）など、単純な端書きを付す。それとは別に、歌に詞書や後書き（左注）を添えて、歌の詠まれた背景や状況をかいつまんで説明する詞書、及び内容を補足する左注がいろいろ案出された。

C 柿本朝臣人麻呂の、近江国より上り来たりし時、宇

治河の辺に至りて作りし歌一首

ものもののふの八十字治川の網代木にいさよふ波の行く
へ知らずも（卷三・二二六四）

この詞書は詠者、場所、時を記すだけなのに、読み手の想像力を誘う。読み手にはこれだけで、人麻呂の名歌「近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ」（卷三・二六六）が思い合わされ、「人麻呂が壬申の乱で荒都と化した近江に心を痛めながら飛鳥へ上る途次、内乱で多くの部民の武士（ものもののふの八十氏）が露と消えた、その宇治川の辺で詠んだ歌」というふうに自ずと読めてくる。読み手は、網代木に遮られて漂う波に無常を観る人麻呂の姿を描き、懐旧の念と無常観が交錯した、複雑な旅人の心情を汲み取るのだ。短歌の狭い表現域を補って余りある詞書の効用である。

Cに見た、詞書が歌の足らず前を補充・補完するといった受動的な機能はすぐに進化して、文人たちは詞書を能動的に活かすやり方を手にした。それは、歌をそれに見合う面白い詞書で自在に物語化する技である。

D 大伴宿祢家持の、非時の藤の花と芽子の黄葉の二物を攀ちて、坂上大嬢に贈りし歌二首、

我がやどの時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が
笑まひを（卷八・一六二七）

我がやどの萩の下葉は秋風もいまだ吹かねばかくそ

もみてる（同・一六二八）

二三歳で愛妾を亡くして途方に暮れていた家持が、数年離絶していた従兄妹の大嬢と復縁して歌のやり取りを始めるとき、時期外れの藤の花と萩の病葉を折り取り、それに添えて贈った歌である。一六二七番歌は上二句が「めづらしく」の序詞で、あなたの笑顔はわが家の時期外れの藤の花のように貴重ですばらしい、という意で、一六二八番歌は、わが家の萩の下葉はあなたのお姿のように、まだ秋風も吹かぬのにもう美しく色づいている、という意である。この二つの比喩は一読の限り、家持が復縁に当たって、世にも珍しい大嬢の美しい色香を称えている歌のように読める。だが、時季外れの花や紅葉はただ珍しいだけの、旬のないあだ花・あだ紅葉ですよ、どうかこの二物みたにならないでね、といった皮肉がどことなく感じられる。勿論、後に家持が妻とするほどの女性だから事実とは異なるのだが、二人はこうした戯れ歌を交わして楽しむ、気の置けない従兄妹同士だったのだ。「非時の二物」という風変わりな比喩が、このように両様の読みを可能にするどころか、むしろ家持の真意は後者か、とも読む人に思わせる、そこが味噌なのだ。

この二例は、編者の添えた詞書が、たまたま歌との間に歌物語的な関係性が生じただけのことだが、歌物語は間違はなくCやDの延長線上に生成した。歌物語の作り手たち

は、詞書を添えることで、歌がより表情豊かになる、時には別歌のように化けることを知り、それを活かす技を磨いた。勢語には時にそうした文学的創意が空回りして、歌が詞書や逸話にフィットしていない章段もなくはないが、いずれも創作の意図や意識は明確に作動している。これが歌物語の正体である。

歌には別意も含意もない単色の自然詠（叙景歌）もあるが、人事詠、とりわけ恋歌は思いを婉曲的に伝えて相手の反応を見ようとするあまり、勢い玉虫色になるのである。光線の具合で玉虫は幾色にも見えるように、歌も読み手の目線いかんで姿が変わる。

E 天皇の蒲生野に遊獵したまひし時に、額田王の作りし歌

あかねさす紫草野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（万葉卷一・二〇）

これは天智帝が禁猟区の蒲生野に出獵した折、同行していた弟の大海人皇子（後の天武帝）が獵場を歩き来しながら、後の額田王に遠くから思いを込めてしきりに袖を振っている、それを見とがめて后が皇子に詠み送った歌である。額田王は皇子との間に皇女をもうけた後、天智帝に召されて後宮に入ったわけありの女性で、皇子が兄の横恋慕に涙をのんだことが、後の壬申の乱の一因だったと言われる女性である。これを、「お止めなさいまし、野守が見てるじ

やありませんか、恥ずかしいわ」といった、嬉しさを堪えながら軽く皇子をたしなめている歌と解くか、深読みして、「まあ、なんて軽はずみなことを。野守の告げ口でお兄様に知れたら事ですよ」と皇子の軽率を諫め、間違つても虎の尾を踏むことのないようにと自重を促している歌と説くか、この歌にはそのいずれをも正解となし得ぬ曖昧さがつきまとう。直叙を好む万葉人の歌にしてからこうなのだ。だが、眼目をことばで明らめない曖昧さが読み手の想像力をかき立て、歌を面白くする。ここでの曖昧さとは、語法から逸れた歌ことはがもたらす曖昧さではなく、歌の核心（眼目）をことさらことばで言い表さないことで生ずる朦朧とした両義性（アンビギュイティ）の謂である。

こうした歌が本来的に持つ朦朧とした両義性は、〈影〉と言ひ換えることができよう。歌物語の作り手はこうした影の見つけ方、生かし方に通じていて、詞書を工夫しては自分好みの掌篇に仕上げる。作り手が本歌の両義性をどのように詞書きして、本歌にない新たな命を吹き込むか、歌の姿を寸言の端書きでどう変えるか、その巧みな技を見てみよう。

F むかし、をとこありけり。深草にすみける女を、やうやうあきがたにや思ひけむ、かゝる歌をよみけり。年をへて住みこし里を出でていなばいと、深草野とやなりなむ

女、返し、

野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ

とよめりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりけり。（勢語一―三段）

この両歌は古今集卷一八の雑下に入集された業平の歌（九七二）と、その返歌（九七三）だが、返歌の二句と三句は「鶉となきて年はへん」となっている。詞書によれば、深草に住んでいた業平が上京する折、「そこなりける人（隣人）に詠み送った歌と、それに対する隣人（作者不詳）の返歌ということになる。「わたしが帰京するころ、この里は荒野になつて恋し恋しと鳴きながら、あなたのお帰りを待ちましょう」といった隣人同士の挨拶程度の歌のやり取りであり、雑の部に分類された歌から推して隣人が女とは考えにくい。この章段の作り手は作者不詳のその返歌を、早速紀有常女の歌ということにして、業平と心優しいその妻（有常女）の相聞歌に仕立て上げ、それに見合う千鈞の後書きを添えた。深草に住んでいた女のもとに長年通ひ続けていた男が女に飽きがきたとみえ、「長年通ひ慣れた里だが、わたしが来なくなつたら深草も荒野になつてしまふかもね」と呟く、女は「仮に荒野になつたら、わたしは鶉となつて鳴（泣）いておりましよう。さすればあなたは狩

りくらいにはお出でなさるでしようから」と返歌した、すると、その歌にぐつときた男は去るのをやめたというのだ。隣人同士の挨拶歌が、ほんの少し詞書をいじるだけで、夫を慕い続ける心優しい有常女の外連味の無い歌が、夫婦の危機を救ったという、しみじみとした掌篇に生まれ変わった。読む人は妻（有常女）の優しさに心を打たれ、愛の力、歌の力を改めて思い知らされる。勢語屈指の名篇である。藤原俊成のおもて歌、「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」（千載集・二五九）は、この章段を本説にしている。

G むかし、をとこありけり。あはじともいはざりける
女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞひぢ
まさりける

色好みなる女、返し、

見るめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人
の足たゆく来る（勢語・二五段）

この両歌は古今集卷一三の恋歌三に、詞書もないまま隣り合わせに収録された業平の歌（六二二）と小町の歌（六二三）である。歌上手で名うての美男美女だから、二人を絡み合わせたくなるのが人の情、さる好事家がそうした編者の思わせぶりの意図を嗅ぎ取って、相聞歌にしまった。男が煮え切らぬ女にじりじりして、「笹をかき分

けて露で濡れた朝の袖よりも、あなたに逢えなくて独り寝する袖は、涙でびしょ濡れだ」と愁訴すると、女は修辞（「見る目」と「海松布」、「浦」と「憂ら」、「刈れ」と「離れ」は掛詞。「海松布」「浦」「刈れ」「海人」は縁語）をたっぷり使って、「海松布（海藻）のない浦のように何の取り柄もないわたしも知らず、足が萎えるまであなたは逢いにやってくる、かわいそうね」とそっけない歌を返す。「色好みなる女」（小町）に、さすがの美丈夫業平も手玉に取られた、と読めそうだ。

だが、「逢うのを拒みもしない、かといつて逢おうともしない女」に送る歌となると、真剣味は薄れて、男が軽くジャブを放ちながら、にやにや女の出方を伺っている歌に読めるから不思議だ。小町の歌もジャブを交わしながら、「あんたもおおばかさよね」とばかり、色恋の駆け引きを心得た、臍長けた女の歌になる。作者はこの相聞を色好みに場慣れた中年の男と女のラブゲームにしたいのであって、それには業平と小町に及くものはない、最高のカップルだろう、と言いたいのだ。

H 昔、をとこ、やもめにてゐて、

なが、らぬ命のほどに忘る、はいかに短き心なるら
む（勢語・一一三段）

勢語のなかで、この詞書はもつとも短い。だが、「やもめにてゐて」のわずか七字の前書きがあることで、頼みの

女から袖にされ、やもめ暮らしを余儀なくされているが、ない男が、短い人生なのに自分のことをすぐに忘れてしまった女の薄情を愚痴る、情けない歌になる。詞書がなければ、すぐに女を忘れてしまったおのれの短慮を嘆く歌に読めてしまう。それではつまらない。蛆うじが湧くと世にいう「男やもめ」のなんとも侘びしい暮らしを彷彿させるから、男の長嘆息まで聞こえてくるような歌に変容するのだ。恐るべき詞書の効用である。

先のAもBも同様で、「はつかなりける（思うように逢えなかつた）女」や、「つれなかりける（冷淡だつた）女」という寸言を添えることで、作者不詳の凡庸な歌でも、女につれなくされた男がそれでも退くことなく求愛し続け、せめて惚れた意気地だけは守ろうとする、冴えない男のいじましさに同情したくなるような歌として、それなりに読めてくる。作り手はどうだとばかり、詞書のさばきの妙を誇示している。

中古の人々が勢語のなかでこよなく愛した章段は、まずもって物語性豊かな甲類だろう。甲類には主従愛、友愛、母子愛などを美しく描いた章段もあるが、あくまで主体は男女のさまざまな恋愛の小物語である。巷まちに流布してすでに伝説化していた業平の色恋話や漂蕩ひょうとう譚に、業平の歌を編み交ぜにしながら物語化する、そうしたハイセンスな歌遊

び（文学遊戯）が織りなすかずかずの章段は、まさにとりどりの愛の掌篇である。

これを能に譬えるなら、小才を利かせ、寸言の端書きで歌の色合いを変えてみせる歌遊びで、読む人に一期一会の色恋がもたらす悲喜劇や哀愁を、むしろ笑いや微苦笑として届ける乙類は、さながら狂言である。この乙類の主役の多くはA、B、Hのように、女に去られたか、愛想づかしされたか、いずれにせよぼつとしない男たちだが、それでも彼らは何としても虚仮あがの一念を通そうして足掻く、そこに笑うに笑えぬ複雑な微苦笑やペーソスが醸かまれるのである。こうした狂言とも言える乙類（小咄こぼせ篇）が、甲類（掌篇）に入り交じっていることで初めて色恋に厚みと幅が増し、その分人間理解が深まるのだ。勢語が親しまれた最大の理由はそこにある。

歌の原義は歓楽である、と「日本古語大辞典」（刀江書院）は記す。歌物語もまた歌回しを楽しむ遊びである。歌の国日本の古いにしへの文人たちは古今の和歌はもちろん、中国の詩文にも通じているあまり、歌遊びの面白さをとことん極めようとする。そうした知的好奇心の持ち主たちが、寄つてたかつてとうとう伊勢物語という稀代の歌遊びの歌文集をもしたのである。たかが歌、されど歌とはかりに、古人は酔狂とも言える歌遊びにこれほどの情熱を傾けたのだ。

〈参考文献〉

- 「伊勢物語」大津有一校注 岩波文庫
「万葉集（全5冊）」佐竹昭広ら校注 岩波文庫
「古今和歌集」佐伯梅友校注 岩波文庫
「千載和歌集」久保田淳校注 岩波文庫

(き
ら
ゆき
お)